

■(乞食)桃水雲溪
とうすいうんけい
キリスト教禁止・1612=

曹洞宗の禪僧であったが、ある日出奔し、以後乞食僧として、完全なアウトサイダー生きた途方もない人物。

この頃、筑後国柳川で、名もない商人の子に生まれる。自分の年齢を知らず、当時の人も伝えていないのでしたしかな生年は分からぬ。父母の名も不明だが、浄土宗の熱心な信徒であったらしい。幼名も不明。

徳川家康没・1616=4歳：
吉原遊郭始・1617=5歳：この頃、*肥前国武雄の円応寺に連れて行かれ、住持の圓巖宗鉄に就いて出家。不思議な靈力を持ち、多くの優れた僧を育てていく禪師圓巖との出会いが、その後の桃水をつくっていく。

利根川付替始1621=9歳：

徳川家光將軍1623=11歳：
イスペニア断交・1624=12歳：この頃には、学業も進んで、頭の良さが周囲の人たちを驚かすようになり、

やがて、_自ら断食や読誦をしたり、深山に籠ったり、大河の淵で坐禪するなどして、変った子と見られるも、師圓巖は動じないが、本人は、師が弟子を集めて五欲について慈説を垂れた際、'たいしたことを、さも難しいように教説される'とつぶやいたというほど、五欲と無縁であった。

寛永禁書令・1630=18歳：
糸割符拡大・1631=19歳：この頃、_諸国遍参(諸方の善智識に参じて心を磨く)の旅に送り出され、

徳川秀忠没・1632=20歳：
_黒衣を纏い編み笠をかぶり、錫杖について、江戸に赴き、神田台にあった曹洞宗の名刹吉祥寺に至って、その学寮に学び、下谷の寺にいた時には、塔婆が垣根代りに使われているのを見るや、托鉢の際ごとに、新しい塔婆を立てて行ったことから、いつしか垣根には使われなくなったという。

その後、_大愚宗築、雲居希膺、

島原の乱終・1638=26歳：この年東海寺を創建した_沢庵宗影など、臨済宗の禪匠に歴参、
鎖国令V・1639=27歳：

初の高札・1642=30歳：_師圓巖が熊本の流長院に移ったことを知るや、師の下に帰って研鑽を続け、

・・・・・・1645=33歳：沢庵宗影が死去。

この間、流長院の本寺である長州の大寧寺の板首を務め、
市中諸法度・1648=36歳：

徳川家光没・1651=39歳：

新利根川完成1654=42歳：_中国の禪僧隱元隆琦が渡来したと知ると、長崎に出掛けて見え、深く感化される。

明暦の大火・1657=45歳：_圓巖の室に入つて、その法を嗣ぎ、

人身売買禁止1658=46歳：*能登の總持寺に赴いて、仏祖の法を継ぐ儀式を済ませ、導師になるに至った。

まもなく、懇請されて、何度も盜賊の災難があつて無住になっていた大坂の法巖寺の住持となり、2年の間に、浪人となつた一家20人余を1か月あまり宿泊させて奉行所の問題になるも正直さで無事切り抜け、訪ねて来て一時弟子になつた慧定(仲の良かつた法弟雲歩の弟子)に偈を与え、もっぱら托鉢をするだけでなく、それを他人たちに与えて歩く乞食僧になるなど、語り草になる多くの印象を残して、大坂を去り、僻地たる肥後南郷の清水寺の住持を3年間、この間、最初の得度の弟子は看ができる。

殉死の禁止・1663=51歳：生まれ故郷の築後柳川に姿を現し、しばらく留まつて説法してほしいという郷里の人たちの懇請を固辞して、島原の晴雲寺に短期間住した後、城主高力左近太夫の招請で禪林寺の住持になり、得度の弟子、チン(王偏に深のつくり)洲と智伝ができる。この間、前住職が植えていた牡丹や芍薬を茶に植え替へてしまつたり、「大藏經」を購入すべく、各地をまわっていた鉄眼道光の經典の講座に参加、流長院の圓巖の後を継いだ法兄船岩と同席、休憩中、その寺の菜園に肥桶をかついで施肥していたところを船岩から咎められるも、'誰でも尻をぬぐう手で合掌するではないか'と満場の笑いを誘つたりするなど、身をもつて、教養文化主義の"きれいごと"を排して、

酒井忠清大老1666=54歳：

入鉄砲出女令1667=55歳：_遠近に名を知られた導師として、多くの高僧の協力も得て、冬季大研修会を開いた際、
足利学校再建1668=56歳：*年が明けて、90日にわたる一切の行事が終了、參集した大衆の別れの挨拶の儀式のため、侍者が部屋に入るも姿は見えず、袈裟袋も杖も無く、'行方は知らねど一足先に発つ'の張り紙、高力左近太夫も渡し場などを固めさせるも行方知らず、以後、生涯出現しなくなる。まさに蒸発であった。没後85年に面山端方の著した「桃水和尚伝贊」により、乞食の群れに身を投じ、草鞋や酢を売つて生計をたて、乞食桃水、酢屋道全(すやどうぜん)と称された、風狂、散聖の人として知られることになる。

そこには、嘆き悲しんだ弟子のチン洲と智伝が師を捜す旅に出て数ヶ月、清水寺近くに乞食が集まっているところに出くわし、そこに師がいるのを発見、戻るように懇願するも拒否されるが、偈を与えられ、一時共に歩いて、行き倒れの癪患者の老乞食に出くわし、そこに残された雑炊を食べることが出来ないのを諭され、結局立ち去られてしまう。すでに出家僧であったが、全ての名利を捨てて行く、そこからも出家、全く紐のつかない布施の行で、ついには阿弥陀仏と対等に交際するに至つたと言、また、面山和尚が熊本の禪定寺に住していた時、釣玄和尚から聞いた知法尼の「桃水が布施を受け癪患者を救つて立ち去つた」と言う話が伝えられる。この間、悪逆無道ぶりが知られた領主は仙台に流罪となつてゐる。

談林派俳諧・1675=63歳：

雲歩禪師が江戸から熊本に帰る途中、摂津の有馬温泉で老いの身を養つた時、腰が痛むと湯治に來ていた桃水から声をかけられ、若き日の二人に帰つて、20日ほど一緒に湯治するも、忽然と姿を消して、最後の別れになり、その後、京都東山の草庵に戻つて暮らすうち、訪ねて来る人がうるさいと、以後も、定着することなかつたが、旧友愚白が在所を探り当つて、弟子とともに見舞いに上がるも、悠然としていて、かえつて見舞われているようだつたと言う。やがて、_角倉了以の孫で京都角倉家を確立した7代玄紀が、帰依していた黄檗宗の高泉和尚から乞食桃水の話を聞いて、ついに自邸に招くことに成功して拝顔、坐禪についての心構えを聞き、その答え'醤油は土用のうちに造るのが、味噌は寒のうちにつくがよい'に感じ入つて傾倒、なんとか定住してもらおうと、工夫を重ね、北山の鷹峰に住む、かつての下男酢屋の茂助の家を紹介、ついに説得して定住、以後、"酢屋の通年"と称して、酢を売りながら、平安無事な日々を送るうち、

八百屋お七・1683=71歳：_威儀厳然として端座したまま、偈を遺して、没した。角倉玄紀から報せを聞いた、桃水の旧弟子チン洲と智伝は、仏国寺から駆け付けて遺骸を迎へ、高泉和尚のもと葬儀を行い、境内に無縫塔を建立した。

田中忠雄「乞食桃水～この途方もない人」(曹洞宗宗務庁)、